

会員証の写真のゆがんだ微笑みを今日より長く持ち歩くなり 細溝洋子

自分の顔写真が印刷された免許証やパスポートを思い浮かべればいいだろう。あまり気に入らない自分の顔を、仕方がないから、しばらく社会向けの顔として容認している、というのだ。自身の思いと矛盾する現実との妥協。むつかしいところを作品化した。

万緑の右ゆ左ゆ闊ぎ合ふ間車軋を傾げ抜けゆく

佐藤博之

繁った木々のポリウム感、走り抜けて行くスピード感がさりげなく感得できて気持ちがいいバイクの歌。ただ「車軋」は「車体」でいい。スピード感が削がれてしまいうように思う。

よく晴れた二月の朝の海浜に駅伝の脚しなやかに並ぶ 曲渕江里子

駅伝のスタート地点らしい。「駅伝の脚」という省略の表現が、ここではよく利いている。何百本もの脚が冬日に光っているのが見える。

朝に筍、夕に蕨をいただきて五月の厨に大鍋ならぶ 森川陽子

筍と蕨を茹でる大鍋。昔はこういう時のために、どこかの家にも巨大な鍋があった。一首が、読者を懐かしい気分にするのは、こういう大鍋のある家が少なくなつてしまったからだろう。

嘶家の二の腕の皮膚みつめおり生温かい不思議な時間 大谷ゆかり

## 短歌の現在

No.437

## 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

寄席で前の方に座って、落語家を近くで見上げる感じだろうと読んだ。最近はずूमらしく、嘶家をうたった歌も多いが、寄席の歌としてフレームの取り方が独特である。

九センチの足で蹴られて起きる朝目覚まし時計の鳴る五分前 吉本万登賀

幼児に起こされるお母さんの歌。「九センチ」「五分前」という数詞を使って特色を出している。

一生を壘を持たずに過ぎゆける我は輝く遊撃手

浅野稔

下句の決まり具合、リズムがいい。着地がいいので歌の姿がいい。意味的には、一塁手や二塁手と違って、特定のベースを持たない遊撃手が、人生の比喩になっているのだろうと読んだ。たとえば、組織や企業に所属しない生き方など。

友だちは少なくて良しと言う君は少ししかおらぬ我の友だち 小畠千佳

最近、人間関係に取材した短歌が、一時期に比べてずいぶん減ってきたように思う。組織内の人間関係、社会的な人間関係、経済的な人間関係等、かなり突っ込んだ関係をうたった歌が多かった時代は終わったのだろうか。そんなことを思っている昨今、面白い人間関係の歌であった。

ゼンマイとオニゼンマイを教えられ白き産毛の渦巻きを摘む 鈴木香代子

山菜摘みを楽しんでいる作。下句の工夫された表現が